第35回原子力委員会
資料第1-2号

ダイアログセミナーから学んだ福島事故

丹羽太貫

2013 年 9 月 24 日

1. なぜダイアログセミナーなのか
2. これまでのダイアログセミナー
3. ダイアログセミナーから何がみえたのか
4. 見えたものへどう対応するか

まだ不十分ですが、学んだことをお伝えします

1. なぜダイアログセミナーなのか

- 現存被ばく状況からの復興では住民が主役
  コミュニティーの構築は地域住民の努力の所産
- ICRP の放射線防護では住民の自助を重視
  福島の2年半は地域の努力による部分が大きい
- 地域住民主導のもとで専門家と行政が役割分担

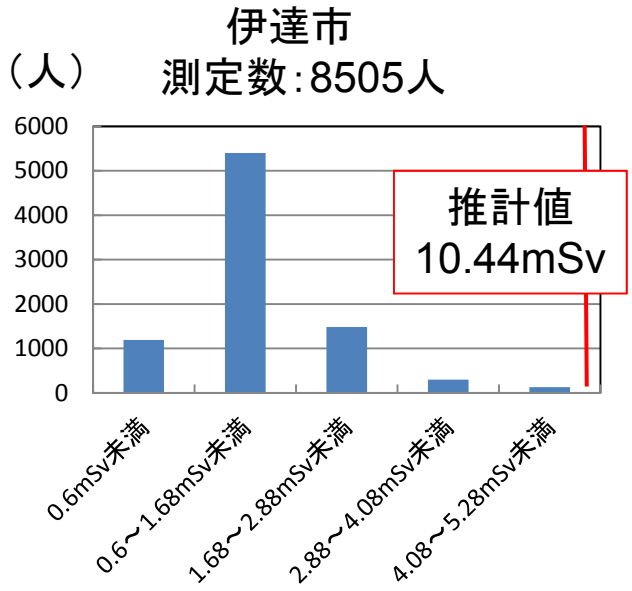
↓

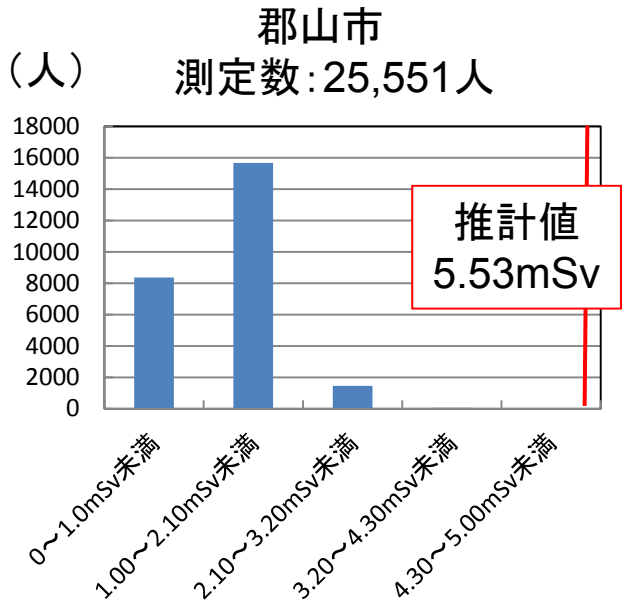
住民との対話の重要性 → ダイアログセミナー

(http://icrp-tsushin.jp/)

自助の例の数々

- 個人、NPO、地域行政による空間・個人線量の測定
- 2012年4月：政府の新食品基準
  → 農水産物の検査は民間・地方行政に依存
  内部被ばく検査も民間依存





2. これまでのダイアログセミナー

- （2011年9月：ベラルーシ南部ブラギン地域訪問）
- 2011年11月：第一回ダイアログセミナー
  福島県庁、福島の現状、県・地域行政・住民・専門家
- 2012年2月：第二回ダイアログセミナー
  伊達市、伊達市の現状、伊達市行政・住民・専門家
- 2012年7月：第三回ダイアログセミナー
  伊達市、食品、生産者・消費者・流通業者・専門家
- 2012年11月：第四回ダイアログセミナー
  伊達市、教育、教師・PTA・専門家
- 2013年2月：第五回ダイアログセミナー
  伊達市、帰還（する、しない）、避難者・専門家・NPO
- 2013年7月：第六回ダイアログセミナー
  飯舘村（飯野）、飯舘村住民・行政・専門家・NPO

ベラルーシ、2011年

2012年2月25･26日　第二回ダイアログ

2012年7月7･8日　第三回ダイアログセミナー

於伊達市
食品について

３．何が見えたのか

事故が住民の方々にもたらした問題

- （底流にある地方の疲弊）
- 汚染地域では生活設計が困難
- 放射線は自己統御感の喪失をもたらす
- 放射線は故郷への誇りと個人の尊厳を喪失させる

事故が見せてくれた放射線防護の問題

- （放射線防護は放射線のリスクから人々を守る）
- 放射線は健康リスクと生活・社会リスクをもたらす
- 健康リスクは線量に依存して少なくなる
- 生活・社会リスクはかならずしも線量には依存せず

４．どう対応するか

生活設計

・汚染地域の経済的な将来を予測することは困難

　　自分の生活設計は困難、子供の将来設計も困難

・とくに長期の避難では

　　個人の生活設計やコミュニティの再生設計は不可能

　　結果として個人の生活やコミュニティーの破壊

　　長期になればなるほど困難は増し、帰還は困難に

・汚染地域在住者と長期避難者にとって

　　個々人の状況に応じたきめ細かい対応が重要

↓

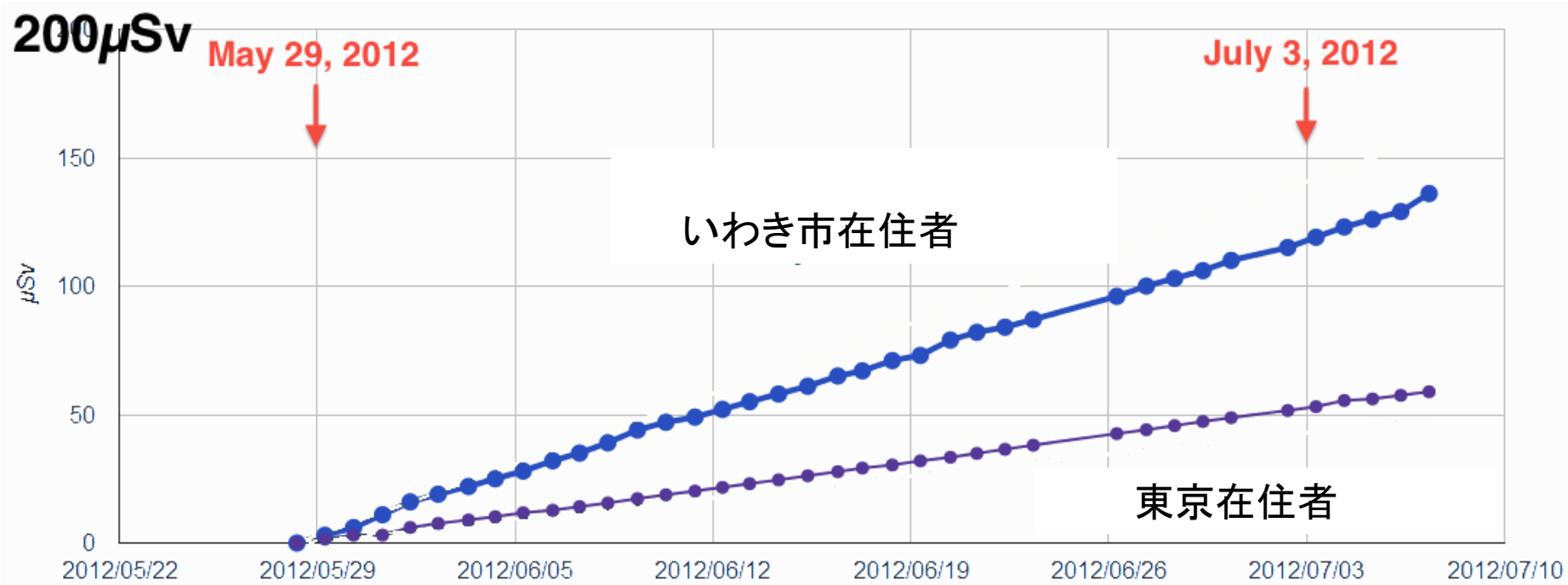
長期生活支援体制の必要性

4. どう対応するか

自己統御感の喪失

- 放射線が統御できることを確認するプロセスが必要
  →個人の実効線量の測定と管理にむけた自助活動

個人線量測定と管理活動では成功例が多い



４．どう対応するか

故郷についての誇りと個人の尊厳の喪失

- 被災地域住民による自助活動が重要
- のみならず外の地域との双方向の価値共有が必須

（健康リスクを伴う災害に共通する問題）

双方向の共有でないと差別化となる

→　事故影響は長期化、地域のみならず国が疲弊

⇩

双方向の価値共有は文化の問題

長期にわたる地道な啓蒙活動が必要

4. どう対応するか
放射線防護の問題

- 現行の放射線防護は健康リスク低減を基本
  → 健康リスク低減には被ばく線量の低減
- 幸い福島事故では、線量は相当低い
- しかし福島事故では、巨大な生活・社会リスクが出現
  間接的健康リスク：緊急避難関連死、事故関連死
  家庭崩壊、コミュニティー崩壊、経済崩壊

↓

生活・社会リスクを考慮した放射線防護体系の必要性